



藤田嗣治 1928年頃 撮影:アンドレ・ケルテス Ullstein bild/Uniphoto Press

藤田嗣治 本のしごと

日本での装幀を中心に

日比谷図書文化館特別展

2013年4月4日(木) - 6月3日(月)

【会場】日比谷図書文化館 1F 特別展示室

【開室時間】10:00-20:00 (土曜19:00、日曜・祝日
17:00まで 入室は閉室30分前まで)

【休館日】毎月第3月曜日(4月15日、5月20日)

【特別展観覧料】一般300円 大学・高校生200円
千代田区民・中学生以下、障害者手帳をお持ちの方
および付添の方1名は無料

【主催】千代田区立日比谷図書文化館

【企画協力】林洋子(京都造形芸術大学准教授)、
株式会社キュレイターズ

千代田区立日比谷図書文化館 (日比谷公会堂となり)

〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4

Tel. 03-3502-3340(代) <http://hibiyal.jp>

アクセス: 東京メトロ丸ノ内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関
駅」C4・B2出口より徒歩5分、都営地下鉄三田線「内幸町駅」A7
出口より徒歩3分、JR「新橋駅」日比谷口より徒歩12分

※当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は
近隣駐車場をご利用下さい。



千代田区立
日比谷図書文化館
Hibiya Library & Museum

Tsuguharu Foujita

藤田嗣治 本のしごと

日本での装幀を中心に

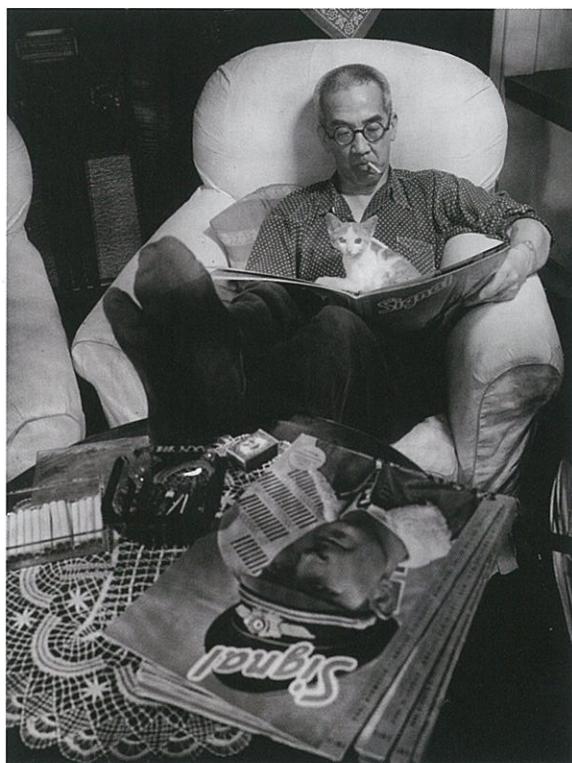
ヨーロッパにおける挿画本の歴史は古く、本としての価値のみならず、「芸術作品」として一つの分野を確立してきました。その時代ごと、一流の画家たちが本の内容に自分自身の解釈とイメージをふくらませた絵を描き、文字と一体となった美しい「挿画本」を生み出すことに夢になりました。とりわけ、19世紀末から20世紀にかけては、印象派をはじめ新しい美術の潮流が挿画本の世界にも多大な影響を与えました。画商ヴォーラルは、ボナールやピカソ、シャガールなど、当時もっとも勢いのある画家たちに依頼して、詩集や小説に彼らのオリジナル版画を挿画として使い、限定版の挿画本を次々とこの世に送り出しました。

藤田嗣治(1886-1968年)がパリに渡った1913年は、こうした挿画本興隆の時代でした。1917年に念願の個展をシェロン画廊でひらき注目を集めた藤田は、1919年にはサロン・ドートヌヴで入選を果たし会員に推挙されますが、すでにこの年、最初の挿画本『詩数篇』を手がけています。1921年に発表した裸婦画が注目を集め、「すばらしき乳白色の地」として大絶賛され、パリ画壇でのゆるぎない地位を確立すると同時に、藤田は挿画本の制作にも精力的に取り組みました。1920年代、藤田は30点以上の挿画本を

手がけていますが、同時代にピカソが手がけた挿画本が10点程度だったことからみても、いかに藤田が挿画本の世界に魅了されていたかがうかがえます。

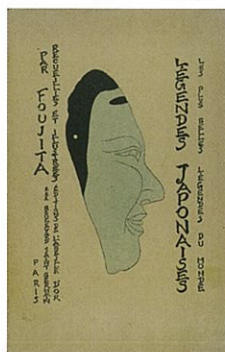
1929年に一時帰国し、その後1933年から日本に定住した藤田は、1949年に日本を離れるまでの間、第二次世界大戦という時代の激流に巻き込まれながらも、挿画本の仕事を続けました。とくにパリ時代から親交があった日本の文学者、詩人、文化人たちとの仕事(協働)の多くは、フランスという地に対する記憶を呼び起こしながら絵筆をすすめたとはいえず、藤田独自の感性と解釈によって、驚くほど多彩に表現されています。

本展では1920年代から40年代まで、藤田にとって二つの祖国ともいえるフランスと日本において、とくに日本で藤田が手がけた「本のしごと」を中心に紹介します。また、1937年から44年までを過ごした麹町区六番町(千代田区六番町)のアトリエでの暮らしにもスポットをあて、写真家土門拳が撮影した当時の貴重な記録も紹介する予定です。一冊の「本」という空間のなかに、油彩画に表現されているのと同じ、あるいはそれ以上に凝縮された藤田の才能と世界観を見いだすことができるにちがひありません。



麹町区六番町のアトリエ (撮影:土門拳) 写真提供:土門拳記念館

フランス時代 — 記憶のなかの日本



『日本昔噺』表紙 1923年



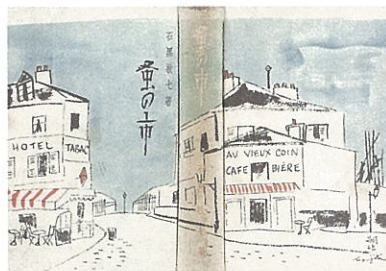
『海龍』より 1955年

日本での婦人雑誌の仕事



『ホームライフ』3月号 表紙 1937年

日本の文学者たちとの交友



石黒敬七 著『蚤の市』表紙 1935年



岡本かの子 著『わが最終歌集』表紙 1929年

ふたたびフランスへ



『魅せられたる河』より自画像 1951年

関連イベント

■トークイベント

「挿絵本の黄金時代と藤田嗣治」

5月18日(土)14時~15時30分 (開場13時30分)

【講師】海野 弘(美術史家)

【会場】4階 小ホール(スタジオプラス)

【定員】60名(先着順、定員になり次第締切)

【参加費】無料

【お申込】TEL:03-3502-3340(代)

E-mail: college@hibiyal.jp

■ギャラリートーク

「藤田嗣治 本のしごと」

5月19日(日)14時~14時45分

【講師】林 洋子(京都造形芸術大学准教授)

【会場】1階 特別展示室

【定員】20名程度

【参加費】無料

【お申込】不要

本展監修者の林洋子氏が展示解説を行います。事前予約は不要です。ご希望の方は当日、利用券購入の上、時間までに特別展示室内にお集まり下さい。(定員を越える場合は、参加者を制限させていただきます) こともあります。予めご了承下さい



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線 ●日比谷線 ●丸ノ内線「霞ヶ関駅」徒歩5分
駐車場 当施設に駐車場はございません。
お車でご来館の際は近隣駐車場をご利用下さい。

千代田区立日比谷図書文化館
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4 TEL 03-3502-3340(代)
<http://hibiyal.jp>

会期中、一部作品は展示替えがあります。